

1. はじめに

善根宿とは、遍路のための簡易的な構えをした小建築である。

私の故郷、高知県室戸市にある室津は、年々人口減少が進んでおり、徐々に衰退している傾向にある中、それでも多くの遍路がやってくる。室津の集落に遍路の札所が存在するからであり、今後も室津へ訪れ続けることが想定できる。だが、立地条件等により、遍路が憩う場所が見られない。札所門前付近では、村民よりもよく見かけるにも関わらず、この地で憩うこともなく早々に集落から立ち去ってしまうことに寂しさを感じる。その一方で、室津には、自然地形と人工物がおりなす魅力的な場所が数多くある。

これらを踏まえて遍路が憩う場所としての善根宿を、室津の魅力的な場所に計画することができないかと考えた。

2. 目的

本設計では、室津を対象に、善根宿を構築することを目的とする。室津の現地調査で得られた、自然地形と人工物がおりなす集落の魅力を活かし、そこに誰もが建築可能な手作りの善根宿を提案する。

3. 調査に見る室津

3-1. 遍路と善根宿

3-1-1. 遍路

遍路とは、四国における弘法大師修行の八十八箇所霊場をめぐる歩く人々である。室津では、集落内に第25番札所津照寺がある。札所が、集落内にあることは稀であるため、遍路が室津で憩うことの意義を感じた。まず、地域に遍路を留めることを目的として、遍路が憩う場所の事例調査を行った。

遍路が憩う場所として遍路小屋、お遍路ハウスとされているものが見受けられた。

以下、調査報告と問題点を示す。

- ・地域や札所との関係性がなく、立地場所の規則性が読み取れない。
- ・空間構成が複雑で建築費用がかかる。
- ・お遍路ハウスは宿泊に料金が発生する。
- ・観光地付近にあり、憩う場所としては立地条件が悪い。

上記から、主に遍路道沿いの札所へと続く中継地に規則性なく点在しており、札所の有無は関係なく集落の一角や道の駅などの観光地付近に多く見られることがわかった。

3-1-2. 善根宿

善根宿とは、野宿をする歩き遍路のために、個人や地域が用意する無料の宿である。遍路道沿いにあり、トイレ等の水回りの設備は付いていない例が多く、主に寝泊まりの機能のみを持った簡易建築である。個人や地域が善意で提供するため、立地場所とともに個性や温かみを感じる面白い小建築である。そのため、インターネット等ではあまり情報が出回っておらず、地域にいくとふいに見つかり、地域でしか感じるができないことが大きな魅力である。ホテルや観光旅館では味わえないようなやすらぎと心遣い、親しみが感じられ、小空間の中に地域の魅力が詰まった憩いの場所である。



図1 善根宿の例

3-2. 室津の魅力

3-2-1. 室津の地形

長年繰り返されてきた地震活動によって生み出された地形であり、集落の地盤面より7~8mも低い位置に港がある。地震による地盤の隆起によって港としての機能は不全となり、そこで海水を堰き止めて掘り下げを手作業によって何度も繰り返して生まれた風景である。室津は港を中心に発展してきた漁村集落である。



図2 室津の航空写真

※1 国土地理院の電子地図 25000 に方位を追記して記載

卒業論文概要

3-2-2.室津の営み

室津の営みとは、地震活動により生まれた地形に対して人工的な利用、改変の工夫の集積を指す。

隆起して迫り上がった室津の集落を人工物である擁壁が支えている。また、地形を活かして集落の一角に畑をつくり、堤防の高さによって年中強く吹く海陸風から畑地が守られている等、室津での厳しい自然環境への備えも見受けられる。

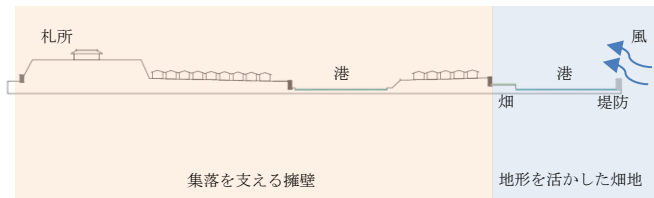


図3 室津の断面ダイアグラム

3-2-3.室津の営み空間

室津の営み空間とは、室津の営みの中で、村民によって工夫が施されており、簡易的に形成されている空間を指す。

以下、調査によって得られた魅力的な室津の営み空間を紹介する。

■単管休憩所



図4 単管休憩所

室津で漁業を営む漁師が自力で建築したと見られる単管休憩所。擁壁の水抜き穴に、単管をはめ込み固定している。水抜き穴のスパン(2000×2000)を活かした簡易で合理的な躯体である。

■擁壁



図5 擁壁の経路

擁壁が戸建て住宅へのアクセス経路として工夫されている様態が伺えた。壁面に対し、垂直に狭い穴のような空間が形成されており、穴が伸びる方向へと導かれ、入っていきたくするような空間であった。

■畑小屋



図6 畑小屋

集落の一角を占める畑地の各領域に点在している畑小屋は、ガルバリウム波板と木材の簡易な構造であり村民が自発的に建築したと考えられる。前面の堤防によって強風から守られ、いずれも綺麗な状態を保っている。

■懸造り



図7 懸造り

漁具庫等の生活のための小屋を土手の斜面に懸造りで設置している。この小屋は土手の一角に複数点在しており、いずれも105角の木材を柱として使用している。

■コンクリート土台



図8 コンクリート土台

懸造りと隣接する斜面には、過去に何かが建築されていた痕跡がコンクリート土台として存在し、排水管も見られることから、水回り空間を担っていた小屋であったことが推察できる。

4. 設計の指針

寝泊りのみの空間を備えた善根宿と、遍路が使用する便所と浴室の水回り空間を設計する。また、遍路の歩く習性を活かして室津で憩い、室津を巡る建築空間を目指す。設計指針を以下に示す。

- ① 集落にある余地を活用する。
- ① 善根宿は、見落とすことがなく、認知しやすい遍路道沿いに構築する。
- ② 水回り空間は、善根宿から認知しやすい場所に構築する。
- ③ 善根宿、水回り空間ともに室津の営み空間の調査で見られる工法を採用した手作り建築とする。

5. 設計の内容

5-1.選定敷地

善根宿の対象敷地は、遍路道沿いの擁壁余地とする。対象敷地は港に面しており、奥へ進むと札所門前付近へ続く。遍路道から室津の集落へと入る時、ぽっかりと空いた擁壁余地は目につきやすく見落とすことがない。いずれも階段やスロープが隣接しているため、容易にアクセスすることができる。



図9 擁壁に沿う余地



図10 余地からの視線

また、擁壁余地から港を挟んだ向かい側に、懸造りの小屋とコンクリート土台を視認することができる。ここを水回り空間の敷地とする。水回り空間は現在使われていないコンクリート土台を活かして設計する。また、隣接する懸造り下の余地は、アクセス経路とし

卒業論文概要

て活用されているなど空間的な価値を感じた。水回り空間は、善根宿から認識して巡るために周辺環境の魅力も活かしたいと考える。



図 11 既存のアクセス経路

5-2.善根宿の設計

5-2-1.善根宿の全体構成

対象敷地である擁壁の余地は三箇所あるが、水回り空間を担う余地が真向かいに見える場所は、遍路道から集落へと入ってすぐの一箇所のみ限定されている。そこで前面の水回り空間が見える余地は受付を兼ねた共有空間として、真向かいにある水回りへの視線を固定するように計画する。その他二箇所の余地を善根宿の寝泊り空間とする。

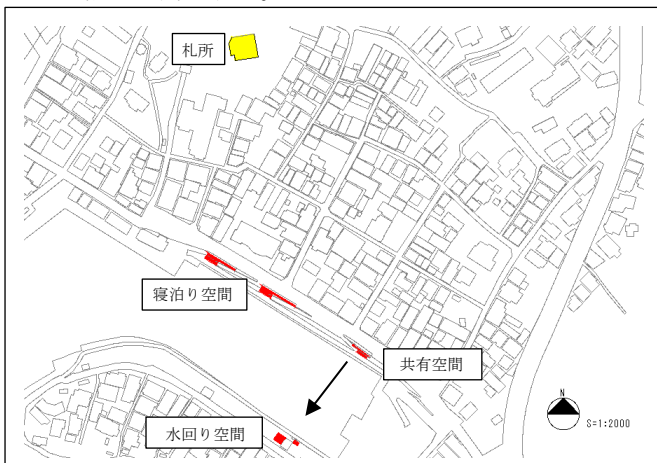


図 12 配置図

※2 国土地理院の電子地図 25000 に要素等を追記して記載

5-2-2.善根宿の空間計画

調査から得られた下記の項目を善根宿の設計に活かす。

■単管



図 13 躯体

単管を水抜き穴にはめ込み、アクセス経路と善根宿の躯体を構築する。躯体の寸法は、単管休憩所を参考に、水抜き穴(2000×2000)のスパンによって決定する。

漁師が憩うための既存の空間を残して上部に善根宿を構築するように組み立てる。

■擁壁

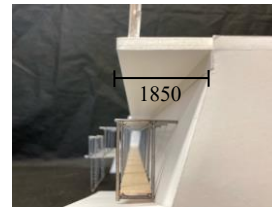


図 14 門前

進行方向と平行に、自然に流入できる措置をとり、善根宿へ緩やかにアクセスすることができる。

擁壁の奥行(D=1850)とスロープによって形成される擁壁下部の狭小な空間を活かして善根宿の門前を構築する。遍路道から港へと繋がる既存のスロープを活用することで、

■畑小屋

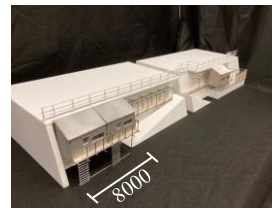


図 15 仕上げ

ガルバリウム波板と木材を用いて、善根宿の仕上げを構築する。善根宿は擁壁下にスロープのない開けた空間(W=8000)に計画することで幅広く余地を活用することができる。

また、前面には高低差のある法面があるため、前面堤防がそびえたつ集落の畑小屋同様に、強風による被害を軽減できる。

5-2-3.工法分解図

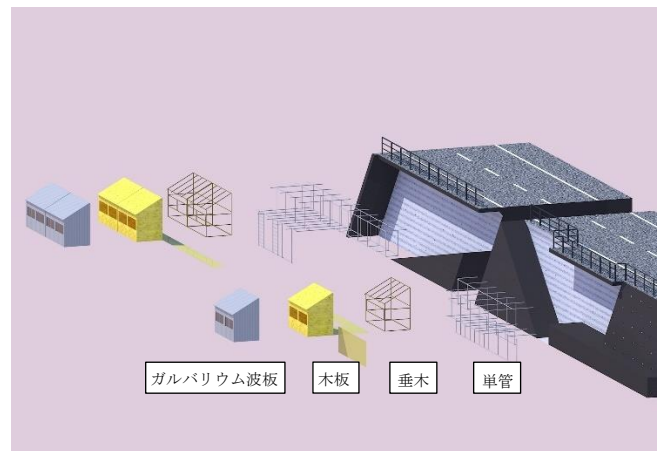


図 16 善根宿の工法分解図

5-3.水回りの設計

5-3-1.水回り空間の全体構成

コンクリート土台は二箇所あり、それぞれのスケールから便所と浴室を割り当てる。また、取り扱う部材は、制作に防水等の制約が伴わない外風呂に採用されている実例をもとに決定する。簡易な浴室空間の部材として、躯体に木材を採用し、仕上げに木板とポリカーボネート波板を用いて水回り空間を構築する。

5-3-2.水回りの空間計画

調査から得られた下記の項目を水回り空間の設計に活かす。

卒業論文概要

■懸造り

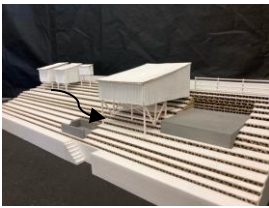


図17 アクセス兼寛ぎ空間

■コンクリート土台



図18 水回り空間

懸造り下の空間をアクセス兼寛ぎ空間として活用する。また、構築する躯体の寸法は、懸造りの躯体(105°角)を参考に決定する。

便所と浴室は、コンクリート土台から立ち上げて構築する。そのため、既存のコンクリート土台の寸法によってそれらの寸法が決定される。また、隣接する懸造り下の空間と経路を活かしてスムーズにアクセスできるように土台上に通路を確保する。

5-3-3.工法分解図

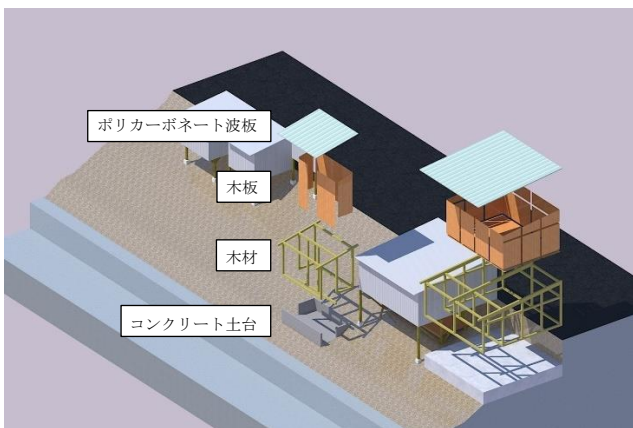


図19 水回り空間の工法分解図

6. まとめ

室津を対象に善根宿と水回り空間を構築することを通じて、室津の魅力を感じながら遍路が憩うための小

空間を形づくることのできた。

善根宿は、室津へ訪れた遍路が見落とすことのない集落の余地を使い、室津の営み空間の工法を活用した手作りの簡易建築物として構築することができた。また、水回り空間は、現在使われていない営み空間を活用して、誰もが建築可能な工法を採用した手作りの簡易建築物として構築することができた。二つの空間は、集落の中核である港を介して、お互いが視認できる位置関係にあることで、遍路が室津の営みを意識しながら憩うことができる。

本設計は、室津に在住している村民の協力のもと、設計者であり、村民である私が建築することを前提としている。この行為から、村民が建築を通して集落と遍路への愛着を深めることで、善根宿の修築等を含めた遍路のおもてなしに自ずと参画する機会が増えていくのではないかと考える。

本設計を機に、善根宿が幅広く認知されることで、集落の持つ魅力が善根宿として表現され続け、遍路だけでなく村民自身も愛着を持つ建築として集落に作り続けながら、あり続けることを願う。

7. 引用・参考文献

- ・※1 国土地理院の GSI Maps 利用
- ・※2 国土地理院の基盤地図情報ダウンロードサービス利用 (<https://maps.gsi.go.jp/>)
- ・四国遍路情報サイト (<https://pilgrim-shikoku.net>)
- ・トラベルニュース (<https://imatabi.travelnews.co.jp/west/19muroto/201911131003383140.html>)
- ・室戸の郷愁風景 (<http://www.kyoshu-komichi.com/muroto.html>)
- ・ジジイの氷割り (<https://icedivider.com/trip/henro/henroyado/>)



図20 港を中心にした善根宿と水回り空間の全体像